

赤井城跡にある知られざる防空壕^{ごう}とは!?

木山中2年生は修学旅行で沖縄県に行き、戦時中の暮らしや平和について学びました。そこで、自分たちの住む町の戦時中の様子を知りたいと思い、赤井城跡にある防空壕^{しろもとますみ}取材するため、赤井地区に住む城本真澄^{しろもとますみ}さんを訪ねました。



①からさらに登っていくと2つの入り口が。私たちも余裕で入ることができそうな大きさです。

沖縄の糸数アブチラガマ

沖縄では、糸数アブチラガマに実際に入りました。アブチラガマは地下にある全長270メートルの自然洞窟で、戦争当時、住民の避難場所だけでなく、病院としても活用されていました。中に入ると、想像以上に真っ暗でした。当時は3つの空気口から入る明かりを頼りにしていたそうです。

赤井城跡の防空壕

赤井城跡にある防空壕は山の斜面に掘ってあり、空襲に備えるための住民の避難場所として活用されていました。

2カ所ある防空壕のうち、①は腰を低くしなければ入ることができないほど入口は小さかったですが、奥行きがありました。②は斜面の上の方にありそこまで登っていくのがとても大変でした。入り口が2つあり、中で1つにつながっていて①より広く、人がたくさん入れそうでした。

- Q、赤井城跡にある防空壕は、自然にできたものですか？
- A、赤井火山が噴火したとき、自然に穴ができたそうです。その後、穴を防空壕として活用するために、赤井の人たちがさらに掘り進めました。
- Q、赤井火山はいつ噴火しましたか？
- A、約14万年前です。阿蘇火山の2回目の大噴火直前と言われています。この土地はスコリアという赤色の火山噴出物でできており、掘り進めやすかったと思います。
- Q、この防空壕は、どんな人が利用していましたか？
- A、赤井地区の人たちが避難していました。戦争を体験した義母の話によると、米軍のB29が上空を飛ぶ度、防空壕に避難していたそうです。その際、義母は義祖母をおんぶして避難していたと聞きました。
- Q、この防空壕は戦後、そのままの形ですか？
- A、そうですね。戦後そのままの形で残っています。



城本真澄さん
(赤井)